

『ナショナルジオグラフィック』

ナショナルジオグラフィック協会編／日経ナショナルジオグラフィック社

ブックガイドなのに雑誌の紹介をしてよいものかと迷ったが、今の生活の傍らにあるのは新聞とこれなので、あまり背伸びせずに身近なものからと考えた。内向きな性格だったためか、読書は小さい頃からその想像の世界に入ることが何となく好きだったが、熟成し完成したのは高校時代の満員に近い通学電車の中だった。それが今では電車の中でも読書できずにパソコンに向かってしまう。読書を渴望すると同時に、余裕がなさ過ぎて情けなくなる。この雑誌の良いところは、こんな私にとっては第一に定期購読で手元に強制的に届き忙しくとも見てしまうところであるが、バラッとめくる、おお！と驚く、美しい！と写真そのものに感動する、へえなるほどと深く記事を読み込む、いずれの形態でも読むことができる自由度にあると思う。表紙写真に何度か掲載されたアフガニスタンの少女の写真はあまりにも有名で、薄汚れたボロの中にあるあの美しい瞳は一度見たら忘れられない。思い起こせば、ナショナルジオグラフィックとの付き合いは大学時代の英語版の頃からで、大学でのデザートのようなものであった。今は毎月上の子とは記事について、下の子どもたちとは鮮烈な写真について、わいわいと会話している。

最新号の内容をご紹介すると、日本の植物であるクズがアメリカで大繁殖し環境問題となっている記事、ハワイ波と生きるではサーフィンの歴史や苦難の歴史を背負った日系人の写真、ダニの奇妙な世界 ダニがチーズ作りに一役買い、水をはじく分泌物を出しているとは、爆風の衝撃に苦しむ帰還兵では、芸術療法で制作された仮面に胸を衝かれる、と同時に爆風が脳そのものに与える影響の科学的調査が進んでいることを知る。続く記事は対照的にアルプスの自然の極上写真が、最後の米国汚染地に暮らすでは、実際の無機物、有機汚染物質、核に汚染された地域の写真とともに1980年に成立したスーパーファンド法（廃棄物による汚染浄化のための法律）での浄化実績がグラフで示されている。このように、自然、社会問題、環境問題、サイエンス、探検、考古学、宗教、…と多彩で、現場の写真と共に豊富なデータやグラフが記事の信頼度を高めている。

名前通り、もともとは地理知識の普及をめざす学術誌としてナショナルジオグラフィック協会から発行されたものであったが、発行部数が伸びずに方針転換し、

人間とのかかわりという視点から未知の世界をわかりやすく伝える、地理学を超えた雑誌となったそう。しかも同協会は、自然、探検、歴史、地球環境、宇宙などの調査・探検研究（約8,000件も）を100年以上にわたって支援したとのこと、タイタニック号の発見、故植村直己氏の犬ぞりでの北極点単独踏破、アルプス氷河で発見された5000年前のミイラ“アイスマン”の研究は御存じの方も多いのでは。雑誌購読料がこれらの活動を支え、人類の英知に貢献している。

掲載写真のレベルが高く、大変美しいことはどの号を見ても一目瞭然である。過去を新たな視点から再発見し、現代をvividな描写で切り取り、未来を冷静に判断する、ブライトリー・イエローを是非一度手に取ってみて下さい。

執筆者紹介

高橋由紀子

物質材料工学専攻准教授。専門領域は、ナノ材料化学、分析化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

【雑誌】『National geographic = ナショナルジオグラフィック』日経ナショナルジオグラフィック社

[ブックガイド目次へ](#)